

12月28日	横浜一山手
11月9日	押上一鐘ヶ淵
10月26日	渋谷
10月12日	大森一馬込
8月17日	中央防波堤一田町
7月23日	高幡不動一多摩動物園
7月13日	早稲田一王子一押上
7月7日	大手町一東銀座
5月25日	四谷一六本木

Nature of Future-環境・文化耕作ゼミ 2013

地形と植生 気象と家屋 2013 一歩行の美学

2013年2月19日 - 2月22日 | 12:00 - 17:00
 @ GALLERY OBJECTIVE CORRELATIVE
 出品者: 木村豪宏、小坂友透、田中丸善一、中川周
 【レクチャー】
 2月22日(土) 15:30 - 17:00
 「都市の自然と政治 -環境・文化耕作ゼミにおける散策実習をふり振り返りながら-」
 講師: 北川裕二

ムードの自然地理学に向けて

Nature of Future-環境・文化耕作ゼミでは、都市における「自然」「環境」とは何か？ 私たちを取り巻く環境は各区域でどのように成り立っているのか？というテーマのもと、毎回、さまざまな区域を散策(フィールドワーク)し、観察記録を重ねてきました。

「環境」と一言でいっても、各区域の実態はきわめて複雑であり、また観察者一人ひとりのもつ「環境」へのイメージも曖昧であり、かつ観察者の心理的状態や気分のありかたによってもまったく違った様相を呈してきます。

そこで、こうした環境の複雑さを理解するにあたり、私たちは環境を形成する主要素を地形、植生、気象、建築・土木の四つのカテゴリーに分け、これらがどのように他の要素と関連づけられ、「環境」としての全体を形成しているのかといった観点から観察することにしました。

また、東京都の地形の特徴に従い、観察する地域も大きく四つに分けました。いわゆる利根川水系とよばれる隅田川と荒川に挟まれた沖積低地(下町低地)。二つ目は、武蔵野台地(洪積台地)から東京湾に向けて複数の河川が流れることによって、複雑に入り組んだ谷地・溪谷を形成している山の手台地。この台地の西に広がる武蔵野平野。そして青梅市の扇状地から雲取山に至る奥多摩・山間部です。

このような各区域は、自然と人工が織りなす形成物が重層し歴史を積み重ねていきました。明治維新、関東大震災、東京大空襲、東日本大震災などによる破壊と繰り返し行われる再開発事業が都市の相貌を加速的に描きかえ、またそのあまりに急速な開発に取り残されていく地域や事物が各区域にまばらに広がっていてもいます。都市にみられる区画整理の諸状態も、環境あるいは空間形成に大きく関わっており、各区域の環境はあり方は政治的=社会的な意味を常に含んでいます。

一般に「観察」といって定点観察を思い浮かべます。定点観察は、観察者が一か所に留まり、対象の状態変化を記録することで観察対象を認識するというものです。しかし、このゼミでは、変化の激しい環境を理解するために、定点観察に対して「動線観察」という考え方を導入しました。区域から区域へ横断的に一日8時間以上を歩くことによって、環境の差異を読み取るうたのです。

こうした前提のもとに散策を繰り返すことでわかってきたことのひとつに、環境とは必ずあるムードをもっているということでした。ムードはどのような地域でも感じられるものですが、各区域によってムード、その雰囲気は大きく異なります。私たちの研究は、今後、このムードの自然地理学的な観察を基調とするものになるでしょう。

そうしたムードの違いを理解するに適した場所が、裏面の地図で扱われているような台地に谷地が入り組む場所とあってよいでしょう。裏面の地図で扱われている区域は、神奈川県横浜市にある山手地区で、地形学的には下末吉面と呼ばれ、四ツ谷や赤坂のある淀橋台と同じ年代に形成された台地で、地形的な特徴も似ています。

各区域に漂うムードは、住民にとっては空気のように自明なものであり、日常的な視界からは除外されているものです。しかし、はじめて訪れた観察者は、このムードを感じとることができます。ムードにせよ、雰囲気はにせよ、それらは必ずしも人工的に構築された空間だけのことをいうのではなく、普段は意識することのない無意識的な自然の諸条件が基底にあって、そのムードの形成に関与しているということなのです。

土木は、この自然的条件を改変します。が、そのときどきの行政がどのような目的をもって改変したのかが明快でないものも見受けられます。いかなる区域においても同様のことが起きています。それらは、普段その土地のムードとしてあるが、ムードとしてある以上、曖昧であり、定かなものではない。というも、自然の不確定性は、土木建築で完璧には制御できないものだからです。

また、私たちの観察においては、観察する当事者の「気分」を重視しています。そもそもムードとは「気分」のことをいいます。ある区域に入った瞬間に感じるムードは、観察者自身のそれと不可分なものです。それらは相互的な関係をもっており、あるムードの中である気分になり、また気分の変化がムードをもつものとして区域を知覚するというものです。むしろ、訪れた区域のムードやそこで感じる気分は、日時や天候に大きく左右されます。雨天や深夜に同じ場所を訪れたならば、当然のごとく日中感じたムードとは異なっています。このことは定点観察がもつ重要性を示しています。

しかしながら、私たちはむしろ一か所にとどまらず移動するものを選択しました。歩くということを認識の基底に据えているのです。歩行は、現代社会では生産と消費にかかわる目的地へ向かうためのものとしてのみ理解されているようです。それに対して私たちは、ある意味でデタラメともいえる彷徨いをあえて行います。出くわした曲がり角の雰囲気に誘われてその道にはいっていき、生産や消費活動からみえればデタラメにすぎない長時間にわたる目的なきぶらつきはしかし、生産・消費活動が繰り返し開発し破壊する都市の無意識の表情を的確にとらえる<方法なき方法>でもあります。